

m)を、小池(1968)は小平上位面と小平下位面に分類している。両者は、比高40m程度の崖によって区切られ、小平下位面が主に古期花こう閃緑岩を切って分布するのに対し、小平上位面の一部は新期花こう岩を切って発達するという。図-9を見ると、小平上位面と小平下位面の分布は標高帯580-680mと480-560mと一致する。小池(1968)によると、阿武隈川流域区と太平洋流域区の分水界に位置する小平上位面の東西両側に小野新町面と小平下位面がそれぞれ分布すると述べていることから、小野町周辺に分布する小野新町面も、図-8の標高帯480-560mに対比させることができる。

以上、南・北阿武隈山地の小起伏面を対比したが、その結果を表-1に整理する。

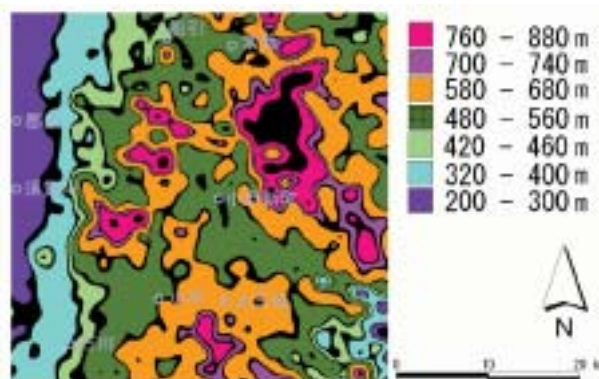


図-9 磐城石川～郡山間の標高帯の平面的分布。

表-1 南・北阿武隈山地の小起伏面の対比

南阿武隈山地(早川・三島, 1997)	北阿武隈山地(小池, 1968)
I面 (760 - 880 m)	
II面 (700 - 740 m)	
III面 (580 - 680 m)	常葉面, 古道上位面, 小平上位面
IV面 (480 - 560 m)	船引面, 古道下位面, 小平下位面, 小野新町面
V面 (420 - 460 m)	熊耳面
VI面 (320 - 400 m)	舞木上位面, 三春面, 曲木面
VII面 (200 - 300 m)	舞木下位面

5. 2 接谷面にみられる谷

5. 2. 1 谷の抽出

図-1に示すように、オリジナルの地形と接谷面が接する場所が谷であると考えられる。そこで、南阿武隈山地をカバーする1/2.5万地形図の6面について、図上0.5cm×0.5cm以上の広がりをもつ谷を読図によって抽出して教師データとし、オリジナルの地形と窓領域のサイズ1.375km×1.375kmの接谷面を使って自動抽出した谷とどれだけ一致するか調べた。その結果を図-10に示す。

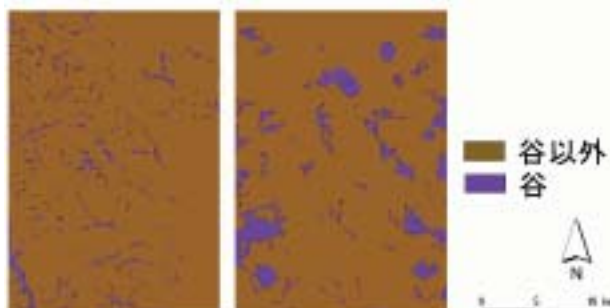


図-10 谷の抽出結果。

図-10の左図が読図の結果で、右図が自動抽出の結果である。読図の結果では、細かい谷が抽出され、実際には図-10で示される以上に多数の谷が抽出されている。自動抽出では、オリジナルの地形の標高から接谷面の標

高を引いた差が0.1m以下の場所を谷とし、それ以外の場所を谷以外と認定した。この閾値を1m, 10m, 100mとより大きくすると、より幅広く谷が抽出できる可能性があるが、実際には1mや10mとしても、0.1mの場合と比較してそれほど正解率(谷, 谷以外と認定された場所が教師データでも谷, 谷以外であるグリッド数が, 全グリッ

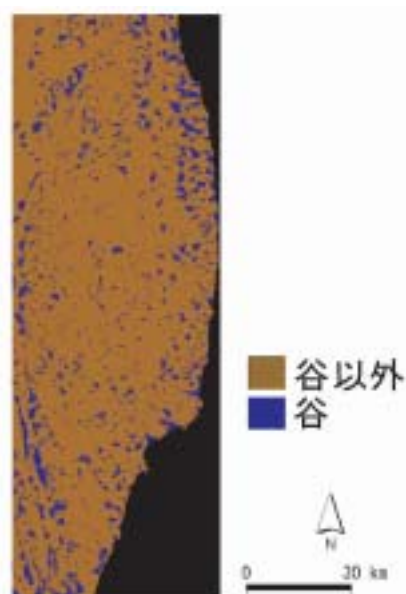


図-11 自動抽出による谷の分布。